

古ジャワ語シヴァ教文献「原理の知識」和訳(1)

安 藤 充

〈序〉

古ジャワ語によるシヴァ教文献の一つ、Tattwajñāna の和訳を試みる。今回は全50節のうちの第1から第18節までを取り上げる。

本テキストは、ジャワおよびバリで受容され展開したシヴァ教の教義を、古ジャワ語散文で解説している。古ジャワの文献の多くは、サンスクリットの韻文をまず示し、それをうけて古ジャワ語散文で翻訳ないしは解説をするというスタイルをとるが、本書は、サンスクリットを各節の冒頭に掲げることはせず、全編を古ジャワ語散文で叙述している。

また、ほかのシヴァ教文献では、例えば、Wrhaspatitattwa や Gaṇapatitattwa のように、天界の行者が質問しシヴァ神が答える形で、教説が披瀝されるが、本書はそのようなスタイルをとらず、諸概念を順に説き進めている。

和訳にあたっての底本は、Sudarshana Devi Singhal 博士が1962年に校訂出版した唯一の刊本である。この刊本には、活版バリ文字によるテキストに続いて、デーヴァナーガリーによる転写も示されているが、ローマ字テキストはのせていない⁽¹⁾。

校注に続いて示されるのは、英訳ではなくヒンディー語訳である。残念ながら筆者はヒンディー語に通じていないが、一見したところ、忠実な翻訳というよりは、ヒンディー語直訳の部分もあれば、抄訳、解説を含む箇所もあるといった赴きである。和訳にあたっては必要に応じて、このヒンディー語訳を参照している。

刊本には英語とヒンディー語で序文がつけられている。英語部分ではテキストの内容概略が示されるだけだが、ヒンディー語の方はテキスト校訂に用いた写本についての言及で始まっている。それによれば、Sudarshana Devi Singhal 博士は、インド・ニューデリーの International Academy of Indian Culture (刊本の出版元) 所蔵の1写本、バリ北部のシンガラジャにある写本資料館 Gedung Kirtya 所蔵の2写本、そしてオランダ・ライデン大学図書館所蔵の2写本、計5本を参照してテキスト校訂したと言う。ライデン大学所蔵写本カタログによれば、Tattwajñāna と題される写本はほかにも存在する。将来的には現存写本すべてを参照するようにしたいが、本試訳は、博士の校訂テキストと校

注にもとづいて進める⁽²⁾。

Tattvajñāna は、タイトルに示されている通り原理 (tattwa) の解説を特色としており、他の古ジャワのシヴァ教文献、特に Wṛhaspatitattwa との関連が注目される。訳注においても、主要な点に関しては両テキストにおける定義や解説との異同について触れるが、インドの典拠について、あるいは古ジャワ語テキスト間の影響関係については、別稿を予定している。

〈訳〉

オーム、つつがなきことを。完全なるものに帰依します。

1

正しき教えに帰依する方⁽³⁾、現世の苦難から逃れんとする方は、これから述べることを心にしかと留められよ。「原理の知識」という尊き教典がある。それを、神々に対して（お示しするの）と共に、そなたに真っ先に教えよう。その原理の知識は学ぶに難しくはない。きっとこの世の苦悩を見極め、その原因に辿り着くであろう。

その「原理の知識」という名称は何（を意味する）かと、誰かが言うかもしれない⁽⁴⁾。（その答えは）聖なる原理の知識と言われるのは、すべての真理の基底となっているものである（からである）。ではどうしてそのようであるか。

2

意識 (cetana) と無意識 (acetana) とがある。意識とは知識、すなわち、記憶にはつきりととどめ、変わってしまったたり欠落してしまったりしない認識をいう⁽⁵⁾。無意識とは、意識の喪失や混濁で記憶がないことをいう⁽⁶⁾。意識と無意識はそれぞれ、シワの原理、幻力の原理と呼ばれる。意識がシワの原理、無意識が幻力の原理である。どちらも細かく小さいが、幻力の原理はシワの原理の下に位置する。幻力の原理は意識がなく、知識を欠いている。

ただ意識の喪失のみあり、記憶が存在しない。本体を構成するものがない。空中をさまようごとく、虚ろで、際限がない。幻力の原理の本質は、意識の喪失、および（意識と）正反対のものである。

（一方）シワの原理の本質は、記憶と光輝である。シワの原理と呼ばれるものは三種ある。すなわち、最高のシワの原理、常住のシワの原理、そしてシワ御身の原理⁽⁷⁾である。

3

最高のシワの原理と言うのは、非顕現の神が静的であること⁽⁸⁾である。（すなわち）

動かず、揺れず、進まず、流れない。原因も目標もない。始まりも終わりもない。ただ静寂で、澄みわたり、音もなく、不動である。全土がそれ（最高のシワの原理）により充ち満ちている。（すなわち）七つの世界がそれに覆われている。七つの冥界にまで満ちている。この世界にもそれが満ち溢れている。それを減じたり増したりすることはできない。義務や目標とはなり得ない。善悪には関わらない。いかなることにも拘ることはない。その原理には過去・現在・未来（というもの）がない。時間によって分けられることがない。常に日中である。途絶えることなく不変である。最高のシワの原理とはこのような特徴である。このように、非顕現の神は静的である。これが最高のシワの原理と呼ばれるのである⁽⁹⁾。

4

常住のシワの原理とは次のようである。常住のシワの原理は活動的である。活動的と言うのは、すべてを知り、なすべきことをすべて行う者という特質を具えているということである。すべてを知り、なすべきことをすべて行う者とは（次の通りである）⁽¹⁰⁾。蓮華座がその席となっている。

（彼に具わる）四種の力と言うのは、列挙すれば、知る力、遍満する力、支配する力、行動する力である。これらが四種の力と呼ばれる⁽¹¹⁾。

知る力には三種ある。すなわち、遠くを見ること、遠くを聞くこと、遠くを感じること⁽¹²⁾である。遠くを見ると言うのは、遠くのを近くに見ることである。遠くを聞くとは、遠くのを近くに聞くことである。遠くを感じるとは、遠くに起こることを身近に心で知ることである。これらが知る力と呼ばれる。遍満する力とは、彼の世界には何かが欠けるということがないということである。支配する力とは、彼の希求するいかなるものにも妨げるものがないということである。行動する力とは、彼がこの世界をすべて生み出す⁽¹³⁾ということである。それだけでなく、あらゆる神鬼、すなわち、ブラフマー神、ウィシュヌ神、シワ神、五仙、七仙、神仙、インドラ、ヤマ、ワルナ、クベーラ、ワイシュラワナ、ウィドゥヤーダラ、ガンダルワ、ダーナワ、ダイティヤ、ラークシャサ、ヤクシャ、デングン、カーラ、ビシャーチャの類い（も生み出す）⁽¹⁴⁾。さらには、地界、地、水、火、風、空、月、日、星も。これが、常住のシワの原理が非顕現のときの働きである。かたや、顕現のときの常住シワの原理の作用はと言えば、論書、経典、教義、医学、論理学、文法学、数学。これが、彼がこの世のすべてにおいての基準となっているときの常住シワの働きである。彼は、顕現・非顕現（の双方）において（すべてを）手中に収めている。彼は始源における支配者⁽¹⁵⁾と呼ばれる。彼は世界の主と呼ばれる。彼は大きい原因⁽¹⁶⁾と呼ばれる。彼は主宰神と呼ばれる。彼は師なる神と呼ばれる。彼は君臨する神と呼ばれる。彼は支配する神という名をもつ。彼は〔常に〕能動であり、受動にはならない。彼は生み出すことも消滅させることもできる。

彼の崇高なる力を越えるものはない。師の中の師である。以上が、常住のシワの原理の特徴である⁽¹⁷⁾。

5

シワ御身の原理と言うのは次のようである。(一方、その前に) 常住のシワについての特徴であるが、編み込まれ、結ばれている⁽¹⁸⁾。編み込まれていると言うのは、ちょうど火きり⁽¹⁹⁾の中の火のようである。木や竹の中でその火は微細である。常住のシワの原理はこのようであり、幻力の原理に遍満している。それは視覚や知覚の対象とはならず、幻力の原理の中に充ち満ちている⁽²⁰⁾。結ばれていると言うのは、ちょうど宝石や水晶のようである。透き通り、輝きを放ち、糸でつながれ、汚れなく、曇りが無い。(しかし) 顔料で赤くされれば、その宝石は色が変わる。幻力の原理の赤色で覆われるのである。それは視覚や知覚の対象とはならず、幻力の原理の中に充ち満ちている。宝石が赤色で覆われるだけである。したがって、宝石と色は分離する。それでその色は元に戻り、透明になる。元の(幻力の原理による) 赤い色が、(宝石の) 実体の上のってそうになったということである⁽²¹⁾。

遍満し、幻力の原理を意識に具現する⁽²²⁾ 常住のシワの原理は以上のようなようである。幻力の原理の本質は穢れである。飾りをほどこされていると言われる。赤く染められている、(それが) 穢れと呼ばれるものである。したがって、心に描いたものが消滅するように、究極的には神の力(が働いている)ということになる⁽²³⁾。常住のシワの原理は水晶のように(それ自体が) 穢されることがない。しかし意識の方は穢れに染められる。幻力の原理により飾られ覆われるのである。ついには意識は朦朧となる。全知であることをやめ、すべてのなすべきことをおこなう者ではなくなる。しかしながら、記憶だけは形を残す。最後にはそれだけが意識となる。なぜシワ御身の原理と言うのか。それは最高の個我と呼ばれる。それは尊き本性(ダルマ)と呼ばれる。それは全世界に満ちている。それは全世界の生きとし生けるものの命となっている。したがって太陽に等しい。(すなわち)(それは)一つで、内部の活動が活発である。しかしその光熱は四方に広がり、あちらこちらへと届く。全世界に遍満する。善も悪も悪臭も芳香も照らす⁽²⁴⁾。太陽の光熱の働きは数多である。悪いものにも善きものにも、臭いものにも香しいものにも及ぶ。色形あるものに及ぶ。太陽がすべてのものに先立つ⁽²⁵⁾。太陽は自らの思うがままであり、それ(の原動力)は内部にある。

尊き本性とはこのようであるが、非顕現の状態にあるときは、第四の境地⁽²⁶⁾の形をとる。その意識は遍満する、すなわち、全世界に広がる。粗大な疑いへと変わり、すべての生類の命となる。(それ故) 意識は幻と呼ばれる。意識を創り出すという意味である。

6

このように尊き本性は讃え述べられる。その（幻の）意識を増進させるものである。主たる神は顕現している（世界の）事物を望み、眼で見る。故に、アートマンは彼の望みどおりとなる。彼によりアートマンは根本原質（pradhāna）の原理と出会う。根本原質の原理と言うのは幻力の原理の子である。したがって、根本原質の原理は本質的に無意識で、曇っている。睡眠（turū）と言うのは、人間にとって、意識の喪失であり、根本原質の原理の具現である。（対照的に）記憶は（意識の）明晰さであり、アートマンの体現である。その記憶が意識の喪失と遭遇すれば、それは根本原質の霊我（pradhānapuruṣa）と呼ばれる。根本原質（pradhāna）と霊我（puruṣa）が出会えば、心（citta）と特質（guṇa）の子供が生まれる。心とは霊我の粗大なものである。特質とは、根本原質の原理のあらわれであり、霊我により知覚される。特質は次の3種に分類される。サットワ、ラジャ、タマ。これらは三特質と呼ばれる。心の特質となっている。それで、サットワの心、ラジャの心、タマの心ということになる⁽²⁷⁾。

7

心と言うのは、三特質によって色づけされ装飾された霊我の意識である。（つまり）心と言うのは、最終的に記憶に刻まれた特徴である。輝かしいサットワが心に付着すれば、知恵あり賢く、分別を知る。優秀で⁽²⁸⁾、泰然とし、風格があり、落ち着いている。猛ることなく、むき出しの言葉を用いることがない⁽²⁹⁾。信仰は篤く、憐れな者に情をかけ、貧しき者や悩める者に心を寄せる。不興の心をおこさず、神に帰依し、自らの悪を知る⁽³⁰⁾。言葉は柔らかく、学説を求め、話す言葉に関しては行者のごとくである⁽³¹⁾。知識、（それも）正しい知識をもつという徳を努めて得ようとする。（それには）疲れも厭わず、怒りも覚えない。その姿は光輝のみである。その営みは見る者に喜びをもたらし、その声は、聞く者の耳を心地よくさせる。そのきわめてすぐれた心性は、他の人々の心に充実と満足をもたらす。（世俗の）望みは減しており、それが実現されないことを（さえ）望む⁽³²⁾。戸惑うことなく、他人の心に安楽をもたらす⁽³³⁾。我執なく迷妄なく行動を起こす。静寂で澄み切った光輝があるのみである。清らかで、遮るものなく、汚れもない。それ故に、それは知識となる。それを見る者は吉祥となる。これがサットワの心の説明である。サットワの心、すなわち、サットワの特質が心に付着しているときの特徴は以上の通りである⁽³⁴⁾。

8

ラジャの心、すなわちラジャの特質が心に付着しているときの特徴は次のようである。落ち着きなく、猛り、動き回る。慌ただしく、癡癡持ちである。激しく、尊大で、妬み深く、落ち込みやすく、荒々しく、短絡的で、すぐに自制がはずれ、情愛に欠け、

憐憫の情なく、体の特徴を誇り、気は強く、怒り、腹立ちも強い。わがままで、貪欲、強欲、残酷で、恐れを知らない。そのいかなるふるまいも並外れており、見る人に恐れを引き起こす。その声を聞く者には耳に痛みを与える。不可侵の高みにあるとの印象を植え付け、他の人々の心に苦悩をもたらす。酔いを嫌い、目標がそれるのをいやがる⁽³⁵⁾。これがラジャの心、すなわち、ラジャの特質が心に付着しているときの説明である⁽³⁶⁾。

9

タマの心、すなわちタマの特質が心に付着しているときの特徴は次の通りである。重く⁽³⁷⁾、気が進まず、秘密で、けだるく、不浄で、食に倦むことなく、冷たく、まぶたが重く、眠り深く、きわめて愚か、好悪はげしく、望み大きく、五感の対象に強くひかれる。血液・精液が横溢し、妻子とも交わり共に寝る。これがタマの心の説明である。以上がタマの心、すなわちタマが心に付着しているときの特徴である⁽³⁸⁾。

10

(以上のように) サットワ、ラジャ、タマは心に付着する。そのためにアートマンはほかのものに変化するのである。その過程を覚えておかねばならない。

サットワのみがあるとき、心には光輝が広がる。それ故、アートマンは解脱を得る。なぜならば、サットワが聖典の精髓をもたらすからである⁽³⁹⁾。全力で、集中して、正しい知識への道を歩み始めるのである。

サットワがラジャと出会うとき、心には(まだ)光輝が広がっている。それ故、アートマンは天界に赴く。なぜならば、サットワは善行を希求し、ラジャは、サットワのあらゆる意図を実践し成し遂げるからである。このように(サットワは)ラジャと結合する。サットワは天界での身体を獲得する⁽⁴⁰⁾。

サットワがラジャとタマとに出会うとき、心には(まだ)光輝が広がっている。それ故、アートマンは人間となる。なぜならば、サットワ、ラジャ、タマがそれぞれの思い通りにならないからである。善行せよ、本務を果たせ、徳行を行え、とサットワは言う。私は怒っている、とラジャは言う。内にこもり気が乗らず、ただ食って寝ろ、とタマは言う。

このようにサットワ、ラジャ、タマは思いめぐらす。(しかし、他の)考えを(互いに)遮って、従うことがない⁽⁴¹⁾。したがって、善も不善も行わず、異なる一人一人が生み出されることになる⁽⁴²⁾。これが人間となる(特質の)結合である。それはアートマンである。三特質が心に付着したときの特徴はこのようである。

三特質が心と出会うとき、統覚(buddhi)が生じる⁽⁴³⁾。(ここで)統覚の特徴を述べよう。統覚は心に留めることをしないようであり、心に留める。統覚は理解しないよう

でいて、理解している。統覚は意識をもたないようであり、意識をもつ。要するに、まばゆく、静にして動かない。統覚は善悪をわきまえる。なぜ統覚という名で呼ばれるのか。それは次の通りである。三特質の粗大さがあり、心によって意識をもつ⁽⁴⁴⁾。それ故、統覚と呼ばれる。

統覚から自我意識が生じる⁽⁴⁵⁾。自我意識には、心の粗大さがある。それ故、意識と言ひ、意識をもつと言う。なぜそのようなのか。なぜならば、意識はその本性としてかなり粗大である⁽⁴⁶⁾。それ故、記憶は多種多様である。記憶の本質は、粗大かつ微細である。

11

以下の次第を記憶に留めておかねばならない。主たる神はアートマンの意識となっておられる。アートマンは心の意識となっている。心は自我意識の意識となっている。測り知れない主の行動力に圧倒されている。それゆえ、支配する主の行動力は命の中の命と呼ばれる。またそれは自我意識の命となり、統覚の命になる。それ故、正しい認識根拠 (pramāṇa) とは、もう一つ別の自我意識のことである。なぜならば、自分は存在するものも存在しないものも如実に捉えることができると誇り、善行も悪行もする⁽⁴⁷⁾。また、万物をわがものにするのは、自我意識の特質にほかならない。私のもの、私の風、私の声、私の考え、私の体。このように自我意識は語る。この自我意識と統覚とは、最高の認識根拠 (pramāṇa wiśeṣa) と言われる。なぜ自我意識と統覚は最高なるものと言われるのか。その理由は、静かにじっとして動かないからである。しかしながら、記憶のみが輝きを放ち、善と悪をわきまえる。これが統覚である。自我意識により、存在するものが知覚の対象となる。(自我意識は) 三種あるが、それは、洗練されたもの (si waikṛta), 激情的なもの (si taijasa), 原初的なもの (si bhūtādi) である⁽⁴⁸⁾。自我意識はそのようである。洗練された自我意識はサットワの統覚、激情的な自我意識はラジャの統覚、原初的な自我意識はタマの統覚である。

12

そ(三種の自我意識)の働きについて述べよう。洗練された自我意識は意識器官 (manah) と十の器官を作る。具体的には(まず)、眼、耳、鼻、舌、皮膚、これらは五つの感覚器官と呼ばれる。そして声、手、足、生殖器官、肛門、これらは五つの行動器官と呼ばれる。この五感覚器官と五行動器官を合わせたもの、それが十の器官と呼ばれる。(さらに) 十一番めが意識器官である。洗練された自我意識の作用はこの通りである。

では原初的な自我意識はどうかと言えば、それは五つの微細を作る。すなわち、声の微細、触感の微細、色の微細、味の微細、香りの微細である。

声の微細というのは、（たとえば）そなたの両耳を覆ってみられよ⁽⁴⁹⁾。声があればそれは聞こえてくる。（聞こえる）声がかすかであれば、それは声の微細と呼ばれる。触感の微細とはこうである。突風がおこり、激しい嵐となったとする。そしてその風がやむ。（しかし）かすかに吹く風が皮膚に浸み入る⁽⁵⁰⁾。これが触感の微細である。

色の微細というのは、黄昏時に陽が西に沈むと、やがてその光がかすかに残るだけになる。そのかすかな光が色の微細と呼ばれる。

味の微細というのは、六味⁽⁵¹⁾を食する（ときの味覚）にたとえられる。食事の後には、舌の上に最後に残っている味のみがある。このかすかな味が味の微細と呼ばれる。

香りの微細というのは、白檀や沈香といった香を嗅ぐのにたとえられる⁽⁵²⁾。（それらが発する）芳香のおおかたは消えてしまうが、鼻にはその香り残り、それを嗅いで楽しむのである。このかすかな香りが香りの微細と呼ばれる。

13

五つの微細から五大元素が生まれる。虚空が声の微細から生じる。それは虚ろな空であり、はてしない。空間をその特徴とし⁽⁵³⁾、声をその特質とする。

風が触感の微細から生じる。嵐⁽⁵⁴⁾や突風のことであり、動きをその特徴とし、触感をその特質とする。

火は色の微細から生じる。それは光と等しい。熱をその特徴とし、色をその特質とする。

水が味の微細から生じる。湿り気をその特徴とし、六味をその特質とする。

地が香りの微細から生じる。粗大な空をその特徴とし、香りをその特質とする。この香りには三種ある。芳香、悪臭、そして普通の臭いである⁽⁵⁵⁾。芳香とは香しいということである。悪臭とは臭いということである。普通の臭いとは香しくもなく臭くもないということである。これが地の特徴である。これは粗大な原理の究極である。

地水火風空、これらより神は世界を創造する。ことごとく上に向かって昇っていく。層をなしているのがその特徴である。下にある原理は上にある原理の特徴をも有している。

その（上下の原理の）特徴というのは次の通りである。空が（最も）高みにある。風がその下にある。したがって、風には二つの特質、すなわち声と触感がある。空と風、（その下に）火がある。したがって、火の特質は三つ、声、触感、色である。

空、風、火、（その下に）水がある。したがって水の特質は四つ、声、触感、色、六味である。

空、風、火、水、（その下に）地がある。したがって地の特質は五つ、声、触感、色、六味、香りである⁽⁵⁶⁾。

14

五大元素の特質が混じり合ったときの特徴はこのようである。神は世界卵⁽⁵⁷⁾を創造する。具体的には次の通りである。七つの世界が最も高いところに位置する。次に七つの冥界がその下にある。世界身と呼ばれる。真実界は高みにある。その下に大世界、その下に人間界、その下に熱界、その下にスバル界、その下にブバル界、その下にブル界となる。

さてこのブル界はすべての原理を蓄積したものである。ブル界には七つの山、七つの海、七つの島、十の風、十の感覚器官がある。そのブル界にすべてが一つに集まっている。

七つの山は、ブル界で地が付着してできたものである。七つの海は、ブル界で水が付着してできたものである。七つの島は、ブル界で火が付着してできたものである。十の風は、ブル界で風が付着してできたものである⁽⁵⁸⁾。十の感覚器官は、ブル界で空が付着してできたものである。以上が、ブル界に集積したすべての原理の特徴である⁽⁵⁹⁾。

七つの冥界⁽⁶⁰⁾とは次の通りである。パーターラ、ワイタラ、ニタラ、マハータラ、スタラ、タラータラ、ラサータラ。七つの冥界の下には大地獄マハーナラカ⁽⁶¹⁾。マハーナラカの下には恐ろしき終末の火カーラグニルドラ。そこでは炎が常に立ち昇り、あたり十万ヨージアナをなめつくす。その終末の火は七つの冥界の礎となっている。この粗大な原理は、層をなし、ミツバチの巣のようである。

これが、原初的な自我意識の根本的な働きである。

15

さて激情的な自我意識の特徴であるが、中間的な⁽⁶²⁾特徴である。洗練されたものと原初的なものを助け、十一の器官および五つの微細を作るのに加わる。

さてこの自我意識は三種の特徴を有するが、統覚から生じる。サットワ、ラジャ、タマとの結合がある。誰がその結合を引き起こすのか。それは正しい認識根拠 (pramāṇa) である。第四の境地にある粗大なアートマン、それが認識根拠と呼ばれる。(対象を) 所有し、実体として認識し、善行悪行をなす。他方、統覚 (buddhi) と意識器官 (manah) であるが、自我意識のみが存在を成立させる一方、統覚と意識器官はイメージを形成する認識根拠を成立させる。(要するに) 自我意識は (対象を) 所有し、善悪の行為を実行する、認識根拠の手段である。認識根拠の特徴はこのようであり、統覚、意識器官、自我意識を成立させるものである。

正しい認識根拠 (pramāṇa) と最高なるもの (viśeṣa) との相違は何か。二つの相違点がある。どちらもアートマンに等しい。しかしながら相違が二つある。認識根拠は最高なるものの下に位置づけられる。(なぜなら) 認識根拠は善悪に関与するが、最高なるものは働かず、義務もなく目標ももたない。善悪に関わることがない。ただじっとた

たずみ動くことがない。揺れず、進まず、漂うことがない。認識根拠と最高なるものの特徴は、それぞれ粗大、微細である。それゆえ、(粗大な方は) 認識根拠と呼ばれる⁽⁶³⁾。両者はアートマンに等しいが、その境地には相違がある。アートマンはきわめて粗大で、拠り所となっている。(認識根拠および最高なるものは) アートマンに従うのである。アートマンは本来、粗大にして微細という性質をもつ。このアートマンが第四の境地にあるとき、最高なる認識根拠と呼ばれる。アートマンが覚醒の境地にあるとき、認識根拠と呼ばれる。また、アートマンが睡眠の境地にあるときも(同様である)。このように、実際、静止して動かないアートマンの呼称として、最高なるものと呼ばれる。活動し、判断をおこなうアートマンは認識根拠と呼ばれる。以上がそれぞれの境地にあるアートマンの特徴である。アートマンは認識根拠であり、最高なるものである。自我意識が認識根拠と呼ばれるのはなぜか。その理由は、それ(自我意識)が所有したり判断したりする手段となっているからである。また、それ(自我意識)が三つからなるかのようにみえる理由は、統覚に類するからである。自我意識は三種類で、統覚の中に場所を占める。その三つが成長すれば五十の子供を得る。(さらにその) 五十は成長して百の子供を得る。その百が成長すれば計り知れない数の子供を得る。これが、アートマンが形を変えた姿である。

16

サットワ、ラジャ、タマのいかなる配合により、天界、地獄界、人間界、畜生界を経巡る(無数の) 形をとることになるのか。

おそらく他の人々はこのように尋ねるだろうが、(答えは) こうである。自我意識は三種であり、統覚の中にある。(つまり、統覚にも) サットワの統覚、ラジャの統覚、タマの統覚とがある。それらはすべて母胎ヨーニの欲するところに従い、生命を生み出す。知識あり、(すなわち) 上述のように展開する原理に通暁している故、母胎は解脱や天界を実現させる。さらには輪廻転生でもある。その流れは次のように覚えておくとよい。

もしサットワの統覚があつて、知識ある者の説く言葉を求め、論書に頼り、正しい知識に専心するとする。そのようなサットワの母胎となるのは、三神⁽⁶⁴⁾である。

もしサットワの統覚があつて、誓言(wrata)、苦行(tapa)、ヨーガ(yoga)、瞑想(samādhi)の意義を追求するとする。そのようなサットワの母胎となるのは、五人の聖仙(pancarsi)である。

もしサットワの統覚があつて、神の供養(pūjārcana)、読誦(japa)、真言(mantra)、神の賛美(kastutyān)を追求するとする。そのようなサットワの母胎となるのは、七人の聖仙(saptarṣi)である。

もしサットワの統覚があつて、善悪に無傾着で、生きとし生けるものに愛情があると

する。そのようなサットワの母胎となるのは、神仙 (dewarṣi) である。

もしサットワの統覚があつて、本務 (dharma)、名声 (kīrti)、名誉 (yaśa)、徳 (puṇya) の教えを追求するとする。そのようなサットワの母胎となるのは、神々 (dewa) である。

もしサットワの統覚があつて、勇猛果敢、剛毅の教えを追求し、恐怖心を制御し⁽⁶⁵⁾、情愛深く、信心篤い故に、身命を捨てることに命を燃やし、法を侵しても (敵を) 殺し、(敵の) 体を打ち砕くとする。そのような人には、行動を起こすのに迷いが無い。勇敢、剛毅なことを行うにも、静まった心があるのみで、意識は澄んでいる。そのようなサットワの母胎となるのは、(天の魔術師) ウィドゥヤーダラである。

もしサットワの統覚があつて、芸術を追求するとする。楽器の音色を聞いて喜び、耳に心地よい美しい音を奏でる。踊りも歌にも熱心で、そぞろ歩きもまめに行う。楽しく美を感じられるものは何でも目指す。香しい花を見て喜びを感じる。そのようなサットワの母胎となるのは、(天の楽師) ガンダルワである。

これらは、解脱の境地に到ろうとする場合には、正しい知識の礎とはならない。しかし、(すでに) 正しい知識を持つ者がそれを礎にするのにはふさわしい。三神はじめ、聖仙、神仙、七仙、五仙が解脱を得る。

サットワの統覚はこのようであり、上、中、下 (の区別) がある。

17

ラジャの統覚について述べたい。ラジャの統覚があつて、よからぬ言葉を発せられたとする。それで怒りが生じ、抑えることができない。(何かほかの) 結果が現れたのではない⁽⁶⁶⁾。他の人が何か言うと、それでことが起こる⁽⁶⁷⁾。体を半分に折り、心は限界を超え、やがて、涙が流れ出る。このようなラジャの (統覚の) 母胎は悪魔ダーナワである。

ラジャの統覚があつて、よからぬ言葉を発せられたとする。怒りが生じ、静かにすることがない。遠くにいて、こう言う。行いはすばらしいが、私に対して好ましからぬことを言われる。欲しいがままにするのをためらうかのようでいて⁽⁶⁸⁾、私の言葉には嫌悪を示し、私の望みはいつでもよいのだろう、と。このようなラジャの (統覚の) 母胎は悪魔ダイティヤである。

ラジャの統覚があつて、よからぬ言葉を発せられたとする。たちまち不快となり⁽⁶⁹⁾、顔を赤らめ体を震わせる。言葉は震え、手も足も震え、獅子吼のごとき叫び声をあげ、思いをすべて、何ら抑えることなく、ほかの人々に吐き出す。このようなラジャの (統覚の) 母胎は悪魔ラークシャサである。

実のところ、ラークシャサは刀の神、王の兵力である。今あるすべての刀は命を奪うことになる。ラークシャサはその神である。ダイティヤは刀の神である。斧や鎚⁽⁷⁰⁾な

どが村人らの武器である。あらゆる刀が望みどおりの暮らし⁽⁷¹⁾を実現する手段となっている。ダイティヤが神なのである。

ダーナワは刀の神である。小刀やはさみなど⁽⁷²⁾は修行者らの武器である。ダーナワが神である。

ラジャの統覚はこのようであり、上、中、下（の区別）がある。

18

タマの統覚について述べたい。タマの統覚機能があるとき、食べ物にはこだわらず、摘み取った野草、米の飯⁽⁷³⁾、一杯のヤシ酒でよしとする。これで心は満ち足りる。このようなタマの（統覚の）母胎は悪魔ヤクシャである。場所としては、人里にいる。この世界の神であり、リング像、神像に宿り、信仰の場にたたずむ。

タマの統覚があるとき、食べ物に対する選り好みはあるが、望みが一つにはまとまらない。気持ちが落ち着かず、恥じらい動揺する。高揚もなく、覚悟もできない⁽⁷⁴⁾。おいしいものを食べても、気持ちはひんやりとしている。このようなタマの（統覚の）母胎は悪鬼デンゲン⁽⁷⁵⁾である。場所としては、ひょうたん⁽⁷⁶⁾、つたに宿る。森の精の神である。

タマの統覚があるとき、食べ物が奪われても、欲するものへのこだわりはない。肉が全部腐ったと言われても、それだけを食事とする。満腹すればそれでよいと言う。このようなタマの（統覚の）母胎は悪鬼カーラである。場所としては、墓地、村境、処刑場、四つ辻に住まう。

タマの統覚があるとき、少量のものは食べようとしない。それ故、結果としては心を乱す。東奔西走し、疲れも知らず、他人のものをだまし取る。そのため、嫌になり疲れ果て、人に嫌われる⁽⁷⁷⁾。食事のときもすぐに辞去し⁽⁷⁸⁾、心地よい音を聞いても、耳で音を捉えるのみである⁽⁷⁹⁾。このようなタマの（統覚の）母胎は悪鬼ピシャーチャである。場所としては、空中にいる。変化することなく進み行く。これは sasawāwuh⁽⁸⁰⁾と呼ばれる。これは世間で言われることである。

タマの統覚はこのようであり、上、中、下（の区別）がある。

サットワ、ラジャ、タマは、アートマンのさまざまな変化を原因とする。以上の通り記憶すべきである。

注

- (1) 古ジャワ語シヴァ教文献とインドのシヴァ教、特に聖典シヴァ派との関連を研究する、Ancrea Acri 氏が、自身のホームページ上に、この刊本をもとにしたローマ字テキストを公開しているが、入力ミスあるいは誤読と思われる部分が少なくない。チェック不足あるいは、きちんと読解しないままの機械的な入力の印象を与え、全面的に信頼することはできない。

い。

- (2) Pigeaud による写本カタログ (Pigeaud 1967–80) 参照。ライデン大学図書館所蔵写本では7つが *Tattwajñāna* を含む。このうち、*Sudarsana Devi Singhal* 博士の校訂テキストに用いられたのは4つ (うち2つは *Gedung Kirtya* 所蔵写本の複写で、博士は原本の方を参照)。残る3つは断片であったり、タイトルは同じであるものの内容が大きく異なったりするようである。将来的には入手可能な全写本を参照してテキストを吟味する必要があることは言うまでもないが、現刊本は、最低限必要な現存写本をふまえているともいえる。
- (3) *sewakadharmā: dharmasevaka* というサンスクリットの熟語が、現地的に倒置した形で、古ジャワ語では一般的。Cf. *Jñānasiddhānta* (JñS) 220.2: *kawiśeṣaṇ in bāyu kawruhakēna de sañ sewakadharmā,* このテキストの注に “*sevaka-dharma in the sense of dharma-sevaka*” とある。
- (4) *anam pih* というフレーズがここにあり、強調をあらわすと思われるが、古ジャワ語辞書 (Zoetmulder 1982, 以後 OJED) に登録されておらず、意味や正確な用法は不明。
- (5) Cf. *Wṛhaspatitattwa* (WrT) 6: *cetana nāranya jñāna swabhāwa wruh tan kēnēn lupa*.
- (6) Cf. WrT 6: *acetana nāranya ikañ tanpa jñāna kadyaṅga niñ watu*.
- (7) *ātmikatattwa*: WrT 6では、*paramaśiwa-*, *sadāśiwa-*, *śiwa-* の三種を挙げる。
- (8) *kasthityan*: OJED 未登録の派生形。古ジャワ語で形容詞としての意味の *sṭhiti* (“constant, firm, steady, stable”) の抽象名詞形ととっておく。
- (9) *paramaśiwa* については WrT 7–10 参照。
- (10) ここにも *anam pih* とあり、意味がはっきりしない。
- (11) *padmāsana* 及び *caduśakti* については WrT 13 参照。WrT では四種の力を *wibhu-*, *praphu-*, *jñāna-*, *kriyā-* の順に挙げている。
- (12) *dūrātmaka*: OJED に登録されていないが、文脈から意味をとって仮に訳す。
- (13) *humanak*: OJED 未登録の派生形。Cf. *umanakakēn* (“to give birth to”), *mānak* (“to bring forth a child”).
- (14) ここに列挙される聖仙および悪鬼に関してはのちの第16–18節を参照。
- (15) *ādipramāṇa*: “first ruler” (OJED). Cf. JñS 110.2: *sañ hyaṇ ādipramāṇa*.
- (16) *bhaṭāra makāraṇa*: ほかの古ジャワ語テキスト (*Sutasoma* 23.1 等) にあるように *bhaṭāra Kāraṇa* (“the Supreme Cause” = *Śiwa*) ととる。
- (17) *sadāśiwa* については WrT 11–14 参照。
- (18) *ūtaprota*: Cf. WrT 14. この古ジャワ語特有と思われる語形については、*Wṛhaspatitattwa* の訳注 (安藤 2005, p. 331) 参照。
- (19) *ēśyēn*: *ēsyēn* = *usuwan* (“firedrill”) と読む。
- (20) WrT 14では *ūta* をバターとミルクになぞらえて説明する。
- (21) WrT 14では真珠が糸で結ばれていることを例示して *prota* を説明する。
- (22) *cumetana*: OJED 未登録の派生形。Cf. *macetana* (“conscious”), *cinetana* (“to be conscious of, perceive consciously”).
- (23) *kadi hilañ kahiḍēpanya, śakti bhaṭāra wēkasan*: この文脈での意味合いがはっきりしない。WrT 14では幻力は神の力により発動するとあるが、これと連関するか。
- (24) *tumeja*: OJED 未登録の派生形。Cf. *mateja* (“shining, glowing, bright”), *katejan* (“shone upon”).
- (25) *tēlas karuhun*: Cf. *Rāmāyaṇa* (RY) 14.11 (*tēlas karuhun*); *Ślokāntara* 47.9, 76.3 (*huwus karuhun*).
- (26) *turyapada*: WrT 47及び60に解説がある。語形、語義については WrT の訳注 (安藤 2007, p. 204) 参照。

- (27) WrT 14では、根本原質の原理は神の行動力 (*kriyāśakti*) により発動し、神の行動力から三特質が生まれるとする。
- (28) *akamūlyan*: OJED 未登録の派生形。 *mūlya* (“of high quality, eminent, excellent”) の抽象名詞形 (*kamūlyan*) に *a-* 接頭辞がついた形容詞形か。
- (29) *tan babak ujar*: *mabak* を “to lay bare” (OJED) にとって仮に訳しておく。
- (30) *arumpat in halanya*: *arumpat* は語形と意味が不明。ヒンディー語釈に従っておく。これから類推すれば、*arumpat* は *arēpat* (“ready, in order”) と読むべきか。
- (31) *kamuni wacananya*: ヒンディー語釈に準じておく。 *kamuni* は *muni* に *ka-* 接頭辞のついた形と推測されるが、OJED に登録されておらず、*ka-* が比喩あるいは変化の意味に用いられる用例も不明。
- (32) *masor ta ya rin abhiprāya, maṅga kociwahā*: 意味するところがはっきりしない。 *kociwahā* は *kociwa* (“being inferior, left behind”) の崩れた形か。
- (33) *umahār sukhāmbēk nin para*: *umahār* の基語と意味が不明。文脈から仮に訳しておく。
- (34) サットワの心の特徴については WrT 17 参照。
- (35) *tan aṅgā korurwa, tan aṅgā sor rin abhiprāya*: サットワの心に関する叙述 (注32のフレーズ) と対照か。こちらも意味がはっきりしない。 *korurwa* は *ururu* (=wērō) からの派生形 (=kawuruwan, kawuron (“drunk, intoxicated”)) ととる。
- (36) ラジャの心の特徴については WrT 18 参照。
- (37) *abēyēt: abyēt* (=abwat “heavy”) と読む。
- (38) タマの心の特徴については WrT 19 参照。
- (39) 同様な表現について、WrT 20 参照。
- (40) サットワとラジャの結合について、WrT 21 参照。
- (41) *tan patūt mapalañ pañan*: *mapalañ, pañan* の意味および語形が不明。ヒンディー語釈では、*mapalañ* を “vibhinna”, *pañan* を “vicara” と訳している。
- (42) サットワとラジャとタマの三者の相互作用について、WrT 22 参照。
- (43) WrT 24では三特質から統覚が生じるとし、それに続いて統覚の作用を分類して (*dharma, jñāna, wairāgya, aiśwarya, adharmā, ajñāna, awairāgya, anaiśwarya, pañcawiparyaya, tuṣṭi, aṣṭasiddhi*) WrT 24–33で詳しく説明する。
- (44) *kacetana de nin citta*: *kacetana* は OJED 未登録の派生形。 Cf. *cinetana* (“to be conscious of, perceive consciously”).
- (45) Cf. WrT 33.
- (46) *saṅśaya*: 文脈により *saṅśaya* (“doubt, hesitation, suspicion”) でなく、*saṅśaya* (“increasingly, more and more, ever more”) と解しておく。
- (47) *maṅlakasakēn: maṅlēkasakēn* (“to undertake, carry out, perform”) と読む。
- (48) Cf. WrT 33.
- (49) *tutupi taliñanta kalih*: Cf. WrT 33: *tutupa taliñanta*. 同様に命令形ととる。
- (50) *umēsēp in kulit: rumisēp in kulit* と読む。 *rumisēp* (“to sink into, penetrate deeply”) の直前に *r* があり、重なって落ちたか。 Cf. WrT 64: *sparsa rinēsēp*.
- (51) WrT 33では、同じ文脈では苦みと甘みのみ挙げ、後に六味について解説している。
- (52) WrT 33では白檀のみ例示する。
- (53) *maweh awan lakṣaṇanya*: *maweh* (“to give, allow”) と *awan* (“way, vehicle, means of reaching”) の組み合わせが意味するところが不明。ヒンディー語釈は「雲を生じる」とする。
- (54) *riwutpata*: ジャワ文字・ローマ字いずれのテキストも *ri wut pata* と区切るが、一語に読

- む (“storm, squall”)。
- (55) WrT 33では、香りは悪臭と芳香の二種とする。
- (56) WrT 33でも、上位の原理が下位の原理に浸透するとし、地の原理はすべての特質を堆積していると述べるが、本書のように各元素について具体的に言及はしていない。
- (57) *aṇḍabhuwana*: サンスクリットの *bhuwanāṇḍa* が現地語的に倒置したものと考えられる。WrT 68でも同形。サンスクリット由来の複合語で、限定語が後分におかれる例については Gonda 1973, p. 463 参照。
- (58) WrT 68では、最高のヨーガ行者の赴く先として *saptadwīpa* と *saptapātāla* を挙げるが、具体的な説明はない。十の風については WrT 39-46 で十の脈管を通る風として一つずつ解説している。
- (59) WrT は *bhuloka* に全く言及していない。
- (60) *saptapātāla*: WrT 68 では個々の名称が示されない。
- (61) *balagardabha mahānaraka*: *balagardabha* の意味が不明。
- (62) *kadi wayuh lakṣaṇanya*: *wayuh* は OJED に “to have or take more than one wife” とあるが、これでは意味がとれない。ヒンディー語訳に従って仮に訳しておく。
- (63) 文末（あるいは次の文の冒頭？）の *taham pih* という語句（否定辞と強調辞）が、この文脈で何を意味するのか不明。
- (64) *tripuruṣa*: 古ジャワ文学では *Brahmā*, *Viṣṇu*, *Śiwa* の三神を指すことが多い (*Rāmāyaṇa* 24.2 など)。
- (65) *tan maliṇ bhaya*: *maliṇ* の語形と意味が不明。Cf. *paliṇ* (“not knowing, not recognizing”). ただし *p* が *m* に変わる理由がないし、*tan* がない方がかえって意味が通る。
- (66) *tan kawētu niṇ wijil henya*: *henya* の意味が不明。
- (67) *mēnaṇ juga*: *mēnaṇ* は *wēnaṇ* から来ているだろうが、文脈上での意味が不明。
- (68) *kadyawaṇawēdya sakarēpnya*: 前半の読みが不明。*kady aṇawēdya* と読むべきか (*aṇawēdi* > *kawēdi* > *wēdi* (“to fear, be afraid of”))。
- (69) *wawaṇ aparāga*: *aparāga* は OJED に登録されていないが、サンスクリット語に *aparāga* (“discontent, dissatisfaction”) があり、これに従っておく。
- (70) *prēkul*: 文脈から *pupukul* (“hammer”) と読む。
- (71) *kamopajiwa*: 校訂テキストにも疑問符がつけられており、異読にも適切な読みがないようである。仮に *kāma-upajiwa* (*kāma* をサンスクリット語のように「思うがままの」の意味に、*upajiwa* は古ジャワ語辞書どおり「暮らし」としておく)。
- (72) *kadyaṅga niṇ pamiso, kartrī karayu*: *pamiso* と *karayu* は意味が不明。文脈からは短刀の類かと推測される。*kartrī* は *kartrā* (“scissors”) にとれる。
- (73) *sgēn: sēga* (“cooked rice”) と読む。
- (74) *hadidiṇ, tan dēlanya, iaṇ-iraṇan, tan dṛpa, tan saṅgraha manahnya*: *hadidiṇ* は校訂テキストにも疑問符がついており意味が不明。*dēlan* は *andēl* (“stability”) に関連する派生形か。*iraṇ-iraṇan* は OJED 未登録の派生形。Cf. *iraṇ* (“shame, embarrassment”). *dṛpa* は *darpa* (“arrogant, elated”) に等しいか。*saṅgraha* は “ready, prepared” ととれる。この部分全般に意味がはっきりとれず、仮に訳しておく。
- (75) *dēñēn*: “a kind of evil spirit” (OJED)。ほかの神鬼がサンスクリット由来である中で唯一、現地的な名称であることが注目される。
- (76) *waṇlu*: このままでは “ankle” を意味するが文脈に合わない。*walū* (= *waluh*, “gourd”) と読む。

- (77) kalĕmah: OJED 未登録の派生形。Cf. alĕmah (“dislike, aversion”).
- (78) dṛpata ya riñ tañjakan: 意味が不明。Cf. adrĕpata (“to get up and leave suddenly?”) あるいは, dṛpataya (= dṛkpāta “letting a glance fall”) と読み, 「眼を落とす(だけ)」と解すべきか。tañjakan は未登録の形。Cf. tumañjak (“a particular kind of eating?”).
- (79) añupiñ juga taliñanya: añupiñ の意味がはっきりしない。kupiñ (“the ear”) と関連するが, 比喩的な意味合いか。
- (80) sasawāwuh: 語形と意味が不明。

参考文献

- Kern, H.
1900 *Rāmāyaṇa kakawin*, 's-Gravenhage.
- Gonda, J.
1973 *Sanskrit in Indonesia*, New Delhi (2nd ed.).
- Pigeaud, Th. G. Th.
1967–80 *Literature of Java*, 4 vols., The Hague.
- Sharada Rani
1957 *Ślokāntara*, New Delhi.
- Soebadio, H.
1971 *Jñānasiddhānta*, The Hague.
- Sudarshana Devi Singhal
1957 *Wṛhaspatitattwa*, New Delhi.
1962 *Tattwajñāna and Mahājñāna*, New Delhi.
- Zoetmulder, P. J.
1982 *Old Javanese-English Dictionary*, 2 vols., 's-Gravenhage.
- 安藤 充
2005 「ウリハスパティの真理(1)」『人間文化』第20号, pp. 319–333.
2006 「ウリハスパティの真理(2)」『人間文化』第21号, pp. 199–219.
2007 「ウリハスパティの真理(3)」『人間文化』第22号, pp. 191–209.